

作…オスカー・ワイルド

翻訳…平野啓一郎

演出…宮本亜門

JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく— V

サロメ

新訳上演
Salome

5/31(木) ~ 6/17(日)

純粹無垢なサロメがいざなう狂気の世界、
ワイルドの傑作が現代的な視点で今甦る！

出演
多部未華子
成河
麻実れい
奥田瑛二

山口馬木也
植本 潤
春海四方
ヨシダ朝
水なきよし
遠山俊也
櫻井章喜
池下重大
谷田 歩
森岡 豊
平川和宏
神 太郎
内藤大希
漆崎敬介
坂本三成
右門青寿
斉藤直樹
ベータ
星 智也
西村壮悟
原 一登
川口高志
林田航平
水野龍司
戸井田稔
鈴木慎平



主催:新国立劇場
共催:TBS
後援:TBSラジオ



特設サイト

新国立 演劇 サロメ

検索

サロメ
前売開始 3/17(土)

チケット(税込)

S席 7,350円/A席 5,250円/B席 3,150円

三作品セット券 発売中

三作品特別割引通し券 海外戯曲 春から夏へ

『負傷者16人—SIXTEEN WOUNDED—』『サロメ』『温室』3公演の特別割引セット券を15,700円(正価17,850円のところ)、『サロメ』S席・他作品A席)で発売します。3公演それぞれご希望のお日にちをお選びの上、お申し込みください。

ボックスオフィス Tel.03-5352-9999

TBSオンラインチケット

TBS イベント

検索



新国立劇場

中劇場 ———— PLAYHOUSE
<http://www.nntt.jac.go.jp/play>

PLAY THE FLASH “SALOME”



Photo by 八二一

純粹無垢なサロメ!? 新国立劇場に登場

平野啓一郎 & 宮本亜門 『サロメ』を語る



お前の口唇にキスした。
 苦い味ね、お前の口唇。血の味なの？
 ……うん、ひよっとすると、恋の味なのかも。
 恋って、苦い味がするって、よく言うから。

『サロメ』の新訳に当たって

平野啓一郎

『サロメ』の旧訳としては、荘重で、エキゾチックな文体が熱烈な愛好家を生んだ日夏耿之介訳がすぐに思い出される。私も幻惑された一人だが、究極の「読むテキスト」であるだけに、舞台上で上演するとなると難しい。タイトな福田恒存訳も優れているが、口語的である分、日本語としては、二世くらい前という感じがする。

いずれ古色を帯びた物語には違いないが、その古さの演出には、キリスト到来の時代の緊迫感とヴィクトリア朝時代のロンドンの退廃とが両ながらに染み渡っていないといけない。そして、それを受け止めるのは、現代の我々の言葉である。

新訳に当たっては、役者が動けるということを第一に考えて、肉体に開かれた台詞を心掛けた。無論、現代の観客が、体の芯から感じ取れるような言葉でなければならない。また、繊細な人物造型を生き生きと蘇らせるために、心理の表現には細心の注意を払った。サロメはなるほど官能的だが、私はむしろ、その無邪気さと、それ故の残酷さを慎重に扱った。

登場人物たちのほんの些細な一言、些細な身ぶりに至るまで、サロメの存在が息苦しいほどに浸透し、やがてその美が、空間のすべてを支配する瞬間をありありと開顕できたならば、翻訳は成功したと言えるだろう。

演出家からのメッセージ

宮本亜門

大正2年、近代劇の女優第一号といわれる松井須磨子は『サロメ』を演じ、当たり役となりました。それ以来、オスカー・ワイルド作の戯曲『サロメ』は日本の現状変化と共に、数々の役者、翻訳、演出によって受け継がれてきました。三島由紀夫においては、初めて買った本であると共に、自らの追悼公演にもなった作品ともいわれています。

ワイルドの『サロメ』は何故こうも我々の心を揺さぶってきたのでしょうか。ヨカナーンの血がサロメを興奮させたように、この戯曲が現代に生々しく脈打っている意味を探りながら、演出をしていきたいと思っています。

Playhouseで『サロメ』を愉しむための some columns

これまでの『サロメ』——耽美にして退廃

世紀末のスーパーstar、オスカー・ワイルド

Salome by Oscar Wilde

オスカー・ワイルドは、ビクトリア女王の眼の手術も担当した眼と耳の著名な外科医の父と、詩人にして熱烈なる愛国者である母との間に、1854年、アイルランドのダブリンに生まれ、アイルランド各界の著名人、芸術家が集うサロンで育つ。学生時代から古典を学び、詩を発表し、先には学者の道も約束されていたが、ワイルドは髪を長く伸ばし、特別仕立ての衣服をまとい、花を携え耽美主義をかざしてロンドン社交界の寵児となる。その鋭い感性と美意識、ウィットに人々は惹かれ、作家としても名をあげ、30歳で結婚、2児をもうける。

が、幸福な家庭生活には取まらず、1891年、自宅のティーパーティで出会ったアルフレッド・ダグラス卿と親しくなり、劇作家としての名声が高まる一方で、ダグラス卿との交際が世間の目をひき、裁判沙汰の末、ワイルドは同性愛行為の罪で重労働を伴う2年間の投獄生活を送る。釈放後、渡仏し執筆活動を再開するが、刑務所暮らしによる身体の不調に加え、不規則な生活や飲酒も追い討ちをかけ、1900年、投宿先のホテルで髄膜炎のため死去、46歳だった。

サロメは「ヘロディアの娘」として新約聖書に記述され、「サロメ」という名は登場していない。が、『ユダヤ古代記』ほかの文献には記述があり、AD14年頃に生まれた実在の女性と考えられている。古代パレスチナの領主ヘロデ・アンティパウスの祝宴での舞踏の褒美として好きなものを与えろと言われ、サロメは母ヘロディアの命により「洗礼者ヨハネの斬首」を求めたとされる。

このサロメの伝承をもとにワイルドは戯曲を執筆、1893年にパリで出版され、翌年ロンドンで出版された英語版はビアズレーの挿絵で話題になったが、その背徳性のために彼の生前にはイギリス本国では上演禁止、1896年によくパリで初演されている（ちなみに、R.シュトラウスによるオペラ『サロメ』は1905年ドレスデンで初演）。聖書のなかの逸話と『ユダ

新国立劇場オペラ公演『サロメ』より
撮影：三枝近志

ヤ古代記』がサロメの源泉であることから、中世から聖史劇や教会を飾るモザイク画やレリーフなどにサロメは登場していたが、ワイルド以後、特にフランスを中心に19世紀になって文学史上で盛んに取り上げられたほか、多くの芸術家たちにさまざまなインスピレーションを与え、絵画、音楽、映画、そして演劇のモチーフになっている。